

特集 東洋英和とメサイア

女声メサイア — 富岡正男先生のお話

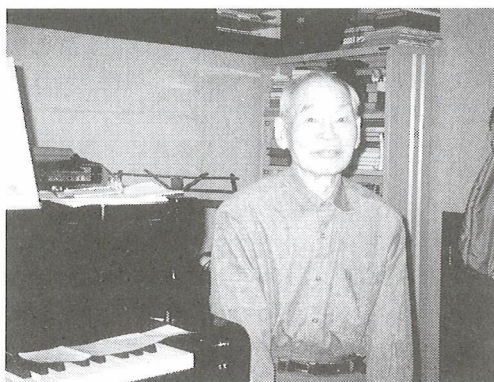
私が東洋英和に赴任しましたのは1952（昭和27）年、その年のクリスマス礼拝にはもう、ヘンデルのメサイアから1曲を女声3部合唱に編曲して歌ったものです。

私は中学1年の時、前橋から出てきて、弓町本郷教会の礼拝堂に入った時に、わーっと混声4部の合唱の響きに取り囲まれて、まるでオルガンのハーモニーのようだったのですが、それが私の音楽との出会いだったのです。国立の音楽学校で音楽理論、作曲、編曲を専攻しました。YMCAの野尻学荘でキャンプの音楽のリーダーをしていたご縁で、故長野彌院長先生から、東洋英和で宗教音楽を教えてほしい、とお声がかかり、張り切ってこの学院にきましたね。

私の前は、学校行事では宣教師の先生がカナダから持ってこられた教材を使って合唱が行なわれていたようでしたが、私は教材を探しては、少しずつ女声合唱用に編曲、時には作曲をして用いました。バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーベンその他古典、ロマン派の作曲家の合唱曲が主でした。

メサイアについて話しますと、東洋英和に在職中の20年間に、メサイア合唱曲全19曲から7曲を女声3部合唱に編曲し、主にクリスマス礼拝、そして一部をイースター礼拝で使ったのです。

クリスマス礼拝がメサイアを入れて、今のようになつたのは、かなり早い頃からです。聖書の聖句を選ぶのは聖書科の先生にお願いし、練習時間を取るために学年合同の音楽の時間（合音）を組むのは教務の先生にお願いして、できたのです。学年によって、歌える曲も違うから、例えば中1はグローリヤをやっと2月頃歌えるようになる。まだハレルヤは歌えないから、11月頃、絆創膏を貼るみたいにね、ハレルヤの



一番おしまいのところ、King of kingsからHallelujahまでの2段だけを歌わせるの。

あとはもう暗記ですね。英和の生徒は英語に強いからね、すぐ暗記しちゃうの。高校生は主に英語の曲でしたね。

さて、英和を定年退職した（1972年）後、やはり退職なさった他の女子校の音楽の先生方が集まっていた府中の女声合唱団から、もっとメサイアを歌いたいから合唱曲を書き足して、と依頼があって、さらに8曲を女声4部に編曲しました。そのうち7曲をその女声合唱団にあげました。それから、女子学院の先生が「うちでもやりたいわあー」とおっしゃるので、もう1曲を足して8曲を歌ってもらいました。昔は宅急便なんかないから、重たい荷物を風呂敷に包んでえっさえっさ持っていったものです。

1992年に、卒業20年を迎える学年から「トミさん、メサイアを歌いたいから指揮して」って頼まれて、大講堂でクリスマスに合唱会を行ないました。これが「メサイアをうたう会」の発端だったですね。最初25人とか40人とか言っていたのに、200人になっちゃった。

そして2年後の創立110周年の年、カナダ大使館で第1回のメサイアコンサートを開催しまし

た。独唱のソプラノ・アルトもオルガンも卒業生だ。ただし私は指揮はできなかつた。私の編曲した「メサイア女声合唱曲集」の発行に向けて、版下書いたり校正したりで、7月8月の2ヶ月完全に伸びちゃったもんでね。

この時、ベッドの上で私はメサイア合唱曲19曲中残りの4曲について、よく見てみましたね。私だけでなくメサイアを編曲なさっている方は何人かおられるのだが、その方達もこの4曲は除いている。でもそれは演奏上の時間の問題なのね、決して見劣りしない立派な曲なんだ。音楽史で「バッハは音楽の父、ヘンデルは音楽の母である」とよく言われるでしょう。あれは男性、女性という区別ではなく、父親、母親としての教養の与え方の違いなんだということ、ヘンデル先生自身の対位法で聖書の言葉を表現しているのだということを感じた。寝てなくちゃいけないときに神様が教えてくださった。勉強のための知恵だったんだね。

ヘンデル先生は19日だから22日だからで一気にメサイアを書き上げたというのだが、私は英和で20年、それから10年で合計30年かかって編曲したんです。10年たって「メサイアをうたう会」ができて今年で10年。非常に長い長いのらりくらのいきさつがあるわけで、不思議なことですな…。

〈元中高部音楽科教諭富岡先生へのインタビューは、まだ肌寒い3月、先生のご自宅に卒業生である委員3名がお邪魔して行なわれました。この後まだまだお話しは続き、1時間の予定が3時間に及ぶインタビューの最中、先生は93歳とは思えないお元気で、曲名の代わりにメロディーを口ずさんだり、ピアノを弾かれたりし

て、いろいろお話を聞かせてくださいました。紙面の都合で、その一部しかご紹介できないことをお詫びいたします。〉

(文責 酒井ふみよ 中高部教諭・史料室委員)

《クリスマス礼拝とメサイア — プログラムから》 酒井 ふみよ

富岡先生ご在職中のクリスマス礼拝のプログラムを見ようと、史料室の記録をあたっていたく一方、中高部地下倉庫を探索した。

1952年には、礼拝は中高部全体で守っており、『合唱 ヘンデル作「救世主」より「一人の御子生れ給う」高1・2選』との記述が見られる。

1956年には、ハレルヤは会衆一同により歌われている。他、メサイア中の3曲が聖歌隊によって歌われている。

1961年になると、中高部は別々となり、メサイアは5曲に増え、学年で分担して歌っている。しかしロシアニの「愛」もクリスマス礼拝で歌われている。

1968年になると、独唱も3曲入りメサイアから6曲となり、讃美歌とメサイア以外の曲は姿を消している。聖書朗読とメサイアの合唱が交互に入る現在のクリスマス礼拝の原型が、この頃には完成しているようである。

中学部では、1961年にはハレルヤが中2・3によって歌われている。1968年にはメサイアからハレルヤの他に4曲も歌われている。

毎年美しいプログラムが用意されており、東洋英和の伝統の一つである格調高いクリスマス讃美礼拝が、富岡先生をはじめ先生方の熱意と労苦の結実として50年前から形作られてきたことを物語っていた。

1961	高等部	クリスマス讃美礼拝	12月20日(水) 8:20~9:30			
	〔説教	由木康牧師	司会	水野誠先生	合唱指揮	富岡正男先生
				ピアノ	成田匡子先生	オルガン
						加藤信子先生
前奏	Sanctus		高2・3	讃詠	558 あれ野に水は湧きて	一同
招詞				合唱	He shall Feed his Flocks	高2
讃美歌	218 (1,2)	夜を守る友よ	一同	聖句	マタイ 11:28-30	朗読者
聖書	ヨハネ 1:9-14		司会者	合唱	His Yoke is Easy	高1・2
祈祷			〃	献金		各級代表
交読	36 [イザヤ 11:1-9]		一同		聖句 ロマ 11:33,36.12:1	朗読者
斉唱	Lord's prayer		〃		感謝祈祷	高3 RAC
讃美歌	100 生ける者すべて		〃	合唱	「愛」	高3
聖句	イザヤ 40:1-5		朗読者	説教	「ヘンデルのメサイア」	由木康牧師
合唱	And the Glory of the Lord		高1・2	祈祷		〃
聖句	マタイ 1:22,23		朗読者	使徒信条	566	一同
讃詠	559 (マリヤの讃歌)		高3	合唱	Hallelujah	生徒全員
合唱	For unto Us a Child is Born		高1・2	讃詠	Benedictus	高3
聖句	ルカ 2:8-14		朗読者	祝祷		由木康牧師
合唱	Glory to God		高1	後奏	Amen	高3
聖句	ゼカリヤ 9:9-10		朗読者			
	イザヤ 35:5-6		〃			

短期大学、大学のメサイア

飯島千雍子

短期大学で初めてメサイアを歌ったのは、1987年のクリスマスコンサートだと思う。その年、音楽担当の私は研修で1年ドイツに滞在していた。キリスト教主義の女子高出身者の多かった短期大学では、以前から「メサイアを歌いたい、せめて“ハレルヤ”だけでも」という声があった。彼らは、高校時代、あるいは中高時代、毎年クリスマスの季節にメサイアを歌ってきていた。しかし、大学で混声のメサイアを歌ってきた私は、混声でなければやらないと心に決めていて、このことについては学生の希望に耳を傾けることをしなかった。そんな私が不在の、鬼の居ぬ間に、トランペットをゲストに迎えてハレルヤを歌ったのが短期大学の「メサイア」初演であった。聞くところによれば、教職員の絶大な協力もあり、大変好評を得、学生たちも大満足の演奏であったという。翌年、ドイツから帰った私のところへ聖歌隊のリーダーであった保育科、英文科の二人の学生がやって来て、「今年もメサイアを歌いましょう」と、申し入れて来た。返事は、「混声でなら」それ以来、1997年まで毎年「メサイア」が歌い続けられた。

最初は“ハレルヤ”の他、“Pastoral”で始まるクリスマスの記事、There were shepherds abiding in the field以下のソプラノ・ソロとそれに続くGlory to Godだけであった。女声パートは聖歌隊と希望者で歌っていたが、後に保育科1年生が中心になり、男性パートに教職員と学生の友人、知人、家族、時には学生が属していた合唱団の応援を得て混声で歌った。アンバランスではあっても、混声の響きはやはり格別であった。また、学生による小編成の管弦楽で伴奏を受け持つようになった。それがきっかけになり、管弦楽部も誕生した。楽器も編成も不十分な管弦

楽部を山中三郎先生が忍耐を持って指導してくださった。先生のお仲間の音楽家の方たちが演奏に加わってくださり、兼任講師の藤樫先生は御自分のコントラバスを担いで助けて下さった。横浜市のオーケストラに属している方々が応援に駆け付けて下さったこともあった。少しずつ曲数を増やし、いつか全曲演奏をと、夢を口にしていたが、実際に演奏できたのは約14曲。その年の状況に合わせて、男声のソリストをゲストに迎えたり、学生がソリストをつとめることもあった。多くの人が集っての演奏が短大メサイアの特徴だった。クリスマスコンサートは、六本木時代の1982年に始まり、100周年行事であった1984年を除いて1997年まで続けられたが、地域の方たちにも親しまれていたクリスマス恒例の行事であった。

四年制大学の「メサイア」は、浜辺達男宗主任のもと1993年から始まり、大学クリスマス礼拝で演奏されるのが恒例となっている。1996年までは国立音楽大学教授の鈴木淳弘先生の御指導を受けて、「メサイアを歌う会」の部員によって演奏された。1997年からは陶山義雄宗主任が中心となり「歌う会」と「コーラス部」、それにキリスト教学を受講している学生有志も参加、同窓会の「メサイアを歌う会」より、市橋佳子さん、大軒京子さんも応援してくださった。その後中高部出身の学生が中心となって聖歌隊も結成され、合唱の輪は広がっている。演奏は富岡正男先生編曲の女声三部、伴奏は礼拝堂のパイプオルガン(深井李々子先生)が受け持っているが、2002年、“ハレルヤ”を、大学に誕生したオーケストラの伴奏で歌うことができた。大学の「メサイア」は、これからも新しい足跡を刻み続けていくであろう。いつの日か、「メサイア」全

曲が演奏されるだろうか、夢の実現を期待している。

(大学教授)



短期大学メサイア

メサイアをうたう会の活動を振り返って

代表 市橋佳子・大軒京子

1993年4月に、東洋英和女学院同窓生有志による女声合唱団として、“メサイアをうたう会”を結成して10年が経ち、この11月には10回目の“メサイアコンサート”を開催致します。

私達は、在学中にキリスト教教育の一環として、数多くの宗教曲を学びました。それらの合唱曲は、入学式、クリスマス礼拝、卒業式等、学校生活の大事な行事の中で歌われ、日々の礼拝で歌われる讃美歌とともに、英和での生活には常に音楽がありました。が、卒業後にこれらの合唱曲を歌う機会は少なく、多くの場合、記憶の片隅に残るのみとなってしまいます。この会の始まりは、1992年、母校の校舎が取り壊しになると耳にしたことにあります。代表を務めております私達二人は、クリスマスの頃になると学生時代に歌っていたメサイアや合唱曲が懐かしく、数人で集っては歌いつづけておりました。その中の誰からともなく“もう一度あの講堂で歌いたい”という声があがり、多くの卒業生が賛同してその話しが口づてでひろがりました。当日マーガレット・クレイグ大講堂に集まった卒業生は230名。年代も多岐にわたりお互い顔を合わせた事もない卒業生達が、恩師、富岡正男先生の指揮のもと、こころゆくまで合唱のひとつときを楽しみました。

これを機に、学院創立110周年記念コンサートの構想が生まれ、翌年4月に会を発足し、1年半の練習期間を経て、1994年11月にカナダ大使館をお借りしての第1回メサイアコンサート開催となりました。指揮者として船橋洋介先生をお願いし、2名の女性ソリスト、及びオルガニスト、120名の合唱、全てが卒業生、また、各方面で活躍していらっしゃる卒業生、学院の関係者の方々が、お力をかけて下さりコンサートを成功に導いてくださいました。



活動当初は、学生時代に使っていた楽譜と富岡先生の手書き譜を併用して練習をしておりました。その後、音楽之友社のお力添えで、1994年4月にメサイアの合唱曲16曲を女声用に編曲した“メサイア女声合唱曲集”を会で自費出版しました。翌年には版權を音楽之友社に譲り、1995年5月に残りの4曲を加えた全20曲の女声合唱曲集として新たに出版されました。この楽譜は順調に版を重ね、本年7月には第8版となり、既に5,000部以上が様々な団体に用いられているとのことです。現在でも、楽譜の表紙には、私達が自費出版した際のデザインである楓の葉のモチーフとガーネット色がつかわれております。これは、東洋英和女学院在学中にこの曲に出会えたことを感謝して、特に私達がこだわったものです。

同窓会気分の集まりではなく、合唱団としての意識を確立する事の大切さを教えられ、その自覚が多少なりともでてきた1995年からは、ソリストとしてもご一緒して頂いている先生方に、ヴォイストレーニングをして頂くという恵まれた環境を与えられておりますが、なかなか先生方のご指導に十分答えられるだけの声が出せず、歌うことの難しさを改めて感じております。

1997年には、渡辺善忠先生をお迎えし、この7年間、牧師でもいらっしゃる先生のもとで音楽は勿論のこと、聖書に基づく言葉の意味を深く学ぶ機会が与えられました。宗教曲だけを歌う女声合唱団として当初はメサイアだけを歌っていた私達ですが、1996年からは、パイプオルガンが設置された母校の新講堂で毎年Early Summer Concertを開催しております。パッハのカンタータなどメサイア以外の宗教曲を学ぶ機会を与えられ、活動の幅をひろげることができました。

ここまで、多くの方々に支えられ私達は活動を続けてまいりました。“敬神”“奉仕”という学院の講堂に掲げられていた二つの言葉は、私達の活動の原点でもあります。これからもその事を覚えてこの会を続けていきたいと願っております。

(1973年高等部卒業)

〈思い出の先生がた〉 6

松本寛二先生との思い出

加藤道夫

1980年6月の突然のご事情で当時の部長、秋月先生が退職されることになり、小学部では部長不在になってしまいました。

その頃の院長先生であられた光明照子先生は懸命に後任の部長探しに奔走されておりました。そんな時、松本先生のお書きになった『あふれる愛の中で』と言う本に出会われ光明先生は、すっかりそのお人柄に魅入られ、自ら二度にわたり神戸まで出向かれて松本先生に直接お会いし、熱心に小学部長になってくださるようお願いした所、その情熱にほだされ神戸女学院中高等部長を退かれ1980年10月1日より小学部長として就任される事になりました。

就任早々に入学考査の親子面接が先生の初仕事になられました。土曜日、祝日返上での考査日程に大変驚かれていたのが思い返されます。

元、共同通信社の記者であっただけに文筆にはひとかどならず優れた力をお持ちでした。又、クラシック音楽をこよなく愛され毎年、夏と冬にはザルツブルクの音楽祭にお出掛けになるほどでした。(一度、天候の関係で飛行機が飛ばず九月の始業式を欠席されたことがあったように記憶しております。)

転任されてまもなく三回に分けて小学部全教職員が部長宅のマンションにお招きを受けました。その時レコードの数の多さ(当時はCDなどなくLPレコードでした。)に度肝を抜かれた思いがした事を今でも思い出します。ご自身でもオルガンを弾かれ又、歌も唄われる根っから音楽好きな方なのだと感じました。

先生が来られてから全学院クリスマス会や卒業式後の謝恩会、入学式後のお茶の会等では毎年、教員はコーラスをさせられる羽目になりました。そのご指導はかなり厳しかったと記憶しています。しかしこのコ

ーラスを通して確かに小学部の教員たちの心が一つに纏まっていったことは、事実であった事を今でも確信しております。

先生は大らかな方で、細かな事より全体を見通しこれから何が必要な事かを常にお考えになり、新たな道を敷かれて行かれる大きな目をお持ちでいらっしゃいました。

子供が大好きでいつも部長室のドアは開かれており、休み時間になると子供達で一杯になっておりました。常にやさしい微笑で語られる先生に児童達は本物の愛を感じ取っていたのだと思います。

小学部教育のために5年6ヶ月の長きに渡りご尽力つくされ1986年3月に退職されました。いつも教職員と児童のために厳しい指導の中にもその著書の通り愛に溢れる生活を送られました。

(小学部教頭)



松本寛二先生略歴

- 1914年 京城(現ソウル)に生まれる
 - 1937年 同志社法経専門学校卒業
 - 1940年 同志社文学部神学科卒業
満州国通信社入社
 - 1944年 応召、46年12月復員
 - 1947年 共同通信社入社
 - 1971年 神戸女学院中高等部長就任
 - 1980年 東洋英和女学院小学部部長就任
 - 1986年 東洋英和女学院小学部部長退任
 - 1993年8月18日 逝去(享年78歳)
- 〈著書〉『あふれる愛の中で』『愛のしるし』
『神様はお急ぎにならない』

〈資料紹介〉 4 英語の校歌

古澤育恵

今回「東洋英和とメサイア」の特集を組むにあたり、「メサイア」の編曲をなさった富岡正男先生のお宅へ取材に伺った際に、英和での音楽教育の思い出のひとつとして、英語の校歌を作曲なさったが、あまり歌われていない、というお話が出た。卒業生でも英語の校歌は知らないという人が多いと思うのでここで紹介したい。

英語の校歌は、1934年(昭和9年)に創立50周年を記念して現在の校歌が北原白秋・山田耕筰両氏によって作成された際に、時を同じくして作られたもので、ヴォーリス氏(旧校舎の設計者であり、詩人、教育者でもある。近江兄弟社学園の創設者)の作詞・米山輝男氏作曲で、詩は実に高貴なものである。ただし、中野登美子先生(昭和14年卒、元中・高等部英語科教諭)によるとミス・ハミルトン(当時の校長先生)は伴奏がジャズのようなのだとあって、お気に召さないらしく、歌われることはなかったそうである。もちろん理由はそれだけでなく、後年東光会会報に中野先生御自身が「昭和10年代になって軍国主義の色も濃くなり東洋英和の英を永と変えさせるような御時世になって、英語の校歌を唱うとは何事ぞ、というお達しもあつたのでしょう」

と書いていらっしやる。今聴いてみると、これはこれでなめらかな美しい曲である。

絶えて歌われることのなかった英語の校歌ではあるが、宝の持ちぐされにしてはならないという先生方の思いが富岡先生に伝わり、1969年、創立85周年を機に新しく作曲され直している。譜面を次頁に掲載したのでご参照頂ければわかるが、“Toyo Eiwa School Song”と題して作られたものに富岡先生は詞の最初の一節から“As Maple Leaf and Cherry Flower”と副題をつけ、それに当時の中・高等部聖書科教諭であった南部泰孝牧師が日本語を添えている。

この富岡先生の作曲なさった校歌は、実はレコード化されて現存しているのである。それは創立100周年記念として1984年に製作されたレコード“風にそよぐ美しきもの”のA面に収録されていて、4月3日に小学部講堂で短期大学聖歌隊によって歌われたものである。聴いてみると流麗でロマンティックな曲想を持った合唱曲である。無伴奏の混声四部合唱曲にも編曲されている。

あまり知られていない英語の校歌ではあるが、これを機に、歌うチャンスがあればとも思う。

As Maple Leaf and Cherry Flower

As Maple leaf and Cherry Flower
With beauty clothe the sturdy tree,
May Knowledge which to all is power
And Truth which makes all people free,
Dear Alma Mater, hour by hour
Go forth to bless the world from thee!

To all thy precepts may we hold
Wherever Duty points our way.
And Reverence and Service mold
The Aspirations of our day;
So to our garnet and our gold
We pledge our loyalty always.

(W. M. Vories, 1934)

楓や桜がその葉と花で
身を飾るように
若き友よ！全ての人に力を与える知識と
万民を自由にする真理を身につけて
この世を祝福するために
わが母校より進みゆけ

敬神と奉仕とが
若き日の願を形成したからには
どのような課題が行く手に示されようと
我らは汝の誠めを守り
わがガーネットとゴールドに
変わらぬ忠誠を誓おう

(訳 南部泰孝)

(中上部教諭・史料室委員)

女声三部合唱 伴奏付

Toyo Eiwa School Song
As Maple Leaf and Cherry Flower

Words by W.M. Vorries, 1934

Music by Masao Tomioka, 1959

Sop. I
Sop. II
Alto
Piano

J = 72

leaf and Cher-ry flow-er With less-ty clothe the star-dy
pro-cepta may we hold Wher-ev-er Du-ty points our

As Ma-ple

tree. May Knowledge which to all is pow-er And Truth
way. And Ho-ver-ance and Service mold The As-

1

2

which makes all peo-ple free, Dear Al-ma-
pi-ra-tions of our day; So to our

bles- the world from thee, Go forth to bless the world from
loy-al-ty al-ways. We pledge our loy-al-ty al-

Ma-ter hour by hour Go forth to
gar-net and our gold We pledge our

theol

To all thy way.

3

4

混声四部合唱 無伴奏

Toyo Eiwa School Song
As Maple Leaf and Cherry Flower

Words by W.M. Vories, 1934

Music by Masao Tomioka, 1969

The musical score is written for a mixed voice quartet in a 2/4 time signature. It features a treble and bass clef for each part. The key signature has three sharps (F#, C#, G#). The tempo is marked as quarter note = 72. The score is divided into five systems, each with a vocal line and a piano accompaniment line. Dynamics include *mp*, *mf*, *f*, and *mf*. The lyrics are written below the vocal line.

As Ma - ple leaf and Chr - ry flow - er With beau - ty
To all thy pre - cepts may we hold Wher - ev - er
clothe the stur - dy tree, May Know - ledge which to all is
Du - ty points our way, And Re - ver - ence and Serv - ice
Pow - er And Truth which makes all peo - ple Free, Dear
mold The As - pi - ra - tions of our day, So
Al - ma Ma - ter hour by hour Go forth to
to our gar - net And our gold We pledge our
bless the world from thee, Go forth to bless the world from thee!
loy - al - ty al - way, We pledge our loy - al - ty al - way.

新史料室紹介

2003年4月、鳥居坂に面した中高部の校舎の南隣に本部・大学院棟が竣工し、この建物に新しく史料室が誕生しました。

1975年、史料室委員会及び史料室が誕生して以来、史料室として設計された最初の部屋になります。史料室創設当初は短大図書館内の一部を借用しており、短大が横浜校地に移転後は旧短大図書館の「特別資料室」と書庫の3階部分を史料室として使用していました。そこは事務所部分と書庫がつながっており、機能的な部屋でしたが、2000年秋、大学院の授業の関係で移転を余儀なくされ、史料室は中高部の5階へ移りました。しかしまたその部屋がコンピューター教室になるとのことで、3階へ移動し、貴重な資料を携えての度重なる引越ははかなり大変なことでした。従来どおり旧短大図書館を史料室書庫として使用していたため、中高部時代は2つの建物を行ったり来たりの日々を過ごしました。このような変遷を経て今回念願の史料室が誕生しました。

新史料室は地下2階の一番奥にあります。入り口には旧マーガレット・クレイグ記念講堂の長椅子が置いてあり、来訪者を迎えます。

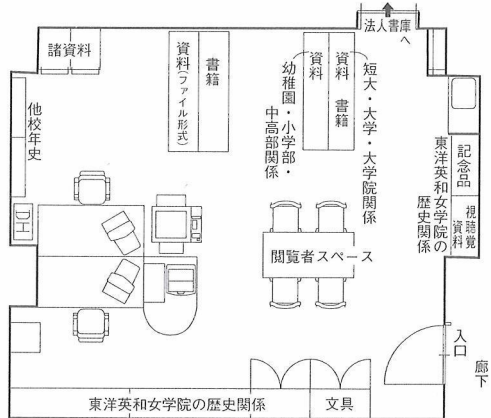
この部屋の大きな特徴は、共用ではありません

が、書庫と隣接しており、史料室内の扉を開ければ書庫に入れることです。面積は44㎡で、以前のいずれの部屋よりも広く、使用頻度の高いファイルや書籍をより多く手許におくことができ、仕事の能率が向上しました。また最近史料室への利用者が増えましたが、閲覧用の机を置くことができ、史料の筆写など、盛んに行われています。

しかし1つ残念なことは、地下2階であるという事。入り口上部にわずかな明り取りがあるものの、窓がない空間で1日仕事をしていると、つらいと感じる時がある事も事実です。外気が入らないため、貴重な資料がかびてしまわないか気がかりで、除湿機をフル活動させています。

今後の課題は資料のデータベース化と、誰もが利用しやすい史料室作りです。資料の展示なども積極的にしていきたいと考えています。英和の古い写真を見たい、戦時中の疎開日誌を読みたい、卒業生の片山廣子、柳原白蓮などの本が読みたい、なんとなく英和の歴史に触れてみたいなど、どのようなことでも歓迎です。多くの方々に利用され、愛される史料室でありたいと、願っています。

(谷川祐子 中高部講師・史料室嘱託)



※訂正とお詫び

No.60 p.3 英文法の授業は2年生からを3年生に訂正して、お詫び申し上げます。

史料室だより 目次No.51～No.60

No.51 (1998.12.4)

特集：鳥居坂の新しいシンボル
 一新マーガレット・クレイグ記念講堂のパイプオルガン

パイプオルガン設置に携わって 河野 和雄
 史料室だより 目次No.41～No.50

No.52 (1999.3.10)

特集・東洋英和女学院大学10年の記録
 開学より10年を振り返って 朝倉 孝吉
 大学礼拝のはじまり 浜辺 達男
 教務よりみた10年 雨宮美和子
 現図書館の歩みを振り返る 中村 隆英
 新設 アクア・エクササイズ・センターについて 宮下 充正

No.53 (2000.2.23)

大学10周年を迎えて 塚本 哲也
 大学創立10周年の記念行事
 イザベル・ブラックモア女史と興望館 野原 健治
 東洋英和女学院に遣わされた宣教師たち 陶山 義雄

No.54 (2000.3.24)

さようなら、校舎さん
 「44ページ」 上村 稔
 校舎お別れする会
 「校舎の思い出」 守屋 敏子
 「古い校舎、ありがとう」 大坂 幸愛
 「校舎とお別れする歌」
 作詞／作曲 1998年度全校生徒
 補作 山内 桜子
 「だいすきなこうどう」 つちや しおり
 「六本木の校しゃさんへ」 みと なつみ
 「こわされる校舎」 金田 優子
 「赤坂での生活」 岩本くるみ

No.55 (2000.12.7)

大成功だった4年間 塚本 哲也
 資料で見る生涯学習センターの歩み
 図書館の新しいすがた 荒木昭太郎
 新図書館のデザインコンセプトと特徴 鬼頭 梓
 カルテットホールの誕生 赤羽 忠之
 <思い出の先生がた> 1
 斉藤浩二先生のこと 沓澤謙一郎

No.56 (2001.3.26)

新校舎よ、こんにちは 寺澤 東彦
 竣工式 定礎式 式次第
 小学部校舎竣工感謝式 式次第
 見取図
 <思い出の先生がた> 2
 忘れ得ぬ人 江良顕三郎先生の思い出
 小野寺 昭夫

No.57 (2001.12.5)

かえて幼稚園その後 土橋 克子
 史料室の歩み(Ⅰ) 1985年～1991年 芝原 翠
 史料室の歩み(Ⅱ) 1991年～2001年 鳥居 美子
 史料室の歩み(Ⅲ) 現在 谷川 祐子
 <思い出の先生がた> 3
 松尾芳子先生の思い出 丹羽 淑子

No.58 (2002.3.15)

上田保姆伝習所・旧宣教師館を訪ねて 石津 珠子
 <思い出の先生がた> 4
 ミス・ハミルトンの思い出 池田 道子
 資料紹介1 「名簿」 谷川 祐子
 2001年度 史料室報告 谷川 祐子

No.59 (2002.11.25)

大学のキリスト教教育—14年経過して 浜辺 達男
 資料紹介2 「定期刊行物」
 『東洋英和新聞』・『かえて』 酒井ふみよ
 『東洋英和ニュース』 陶山 義雄
 『小羊』 東 夏子・叶田 光恵
 『東光』 谷川 祐子
 <思い出の先生がた> 4
 短期大学の牧者であった伊藤之雄先生 伊勢紀美子

No.60 (2003.3.14)

東洋英和の英語授業の思い出 江藤 ゆき
 大正・昭和初期の英語教科書 谷川 祐子
 <思い出の先生がた> 5
 石井次郎先生の一味違った礼拝 新富 英雄
 <資料紹介> 3 定期刊行物
 『校友会誌』・『楓』 陶山 義雄
 『東洋英和女学院 短大だより』
 ～校友会新聞部発行『楓』も含めて～
 飯島千雍子
 『コイノニア』 古澤 育恵
 2002年度 史料室報告 谷川 祐子